

志摩郡

筑子の續風土記

卷之二十二

和書門			
二九〇七〇	二九	二九	二九
號	函	架	冊

内閣文庫		
和書	二九〇七〇	二九
類	號	冊
	七	七
	架	架

内閣文庫	
番號	和 29070
冊數	29 ( 22 )
函號	176 51



Kodak Gray Scale

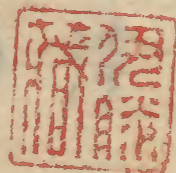
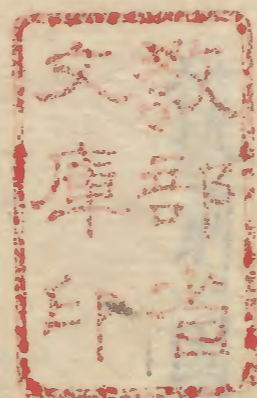
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



内一〇二八二號

筑前國續風土記 卷之廿二

志摩郡

志登社 青木村 七寺川 油坂

長垂山 今津 誓願寺 勝福寺 榎子岳

小田村 唐泊 大歳大明神社 東林寺

宮浦 釋迦牟尼塲 玄界嶺 柱嶺

西浦 櫻井 野北村 芥屋

芥屋 大門 立石 寄穴 背燈耳

烏帽子嶺 小金丸邑 可也ノ山 可也ノ海

岐郡志 南林寺 新町 姫島

次我船越 引津 御床村 邊田村

新田村 潤村 益水勸音 白栴坂 平等寺址 畑江

馬場 泊村 大日寺 板持村

婦使石 津和寄屋 大蛇寫 東林寺

志登山 今 新 志摩郡

志登山 青木林 志摩郡

志摩郡

統前國續風土記 卷之廿二

統前國續風土記 卷之廿二



志摩郡

續日本記 元明三皇和潤二年 統前國鴻郡

志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡

志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡

志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡

志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡

志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡

志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡 志摩郡

内一〇一八二號





韓良久米今津の志を今も登志今津の志を今も  
明敷 雉永 川急 志摩

今称を於所志村の名

青木谷 女原田尻  
太昂丸 高田板持池田  
波多江 志登田 浦志  
前原 萩原大浦船越  
久我久我浦 新町 岐志  
岐志浦 苅屋 小金丸 貝塚

津床 急田 同浦 津和寄  
稻富 油岡 馬場 松隈  
井田原 吉田 野北 埜北浦  
櫻井 草場 素原 元岡  
油比 泊 新田 小田  
西浦村 西浦 宮浦 唐泊浦  
今津 濱寄浦 横濱 姫嵩  
久嶋十玄界 大蛇嵩

志登社

志登村より延喜式神名帳より佐土郡志登社  
社座小と存されども今と志登郡より属次系  
志登処の志登大明神と豊玉姫山と相懸の  
神三所有第一と神切皇座第二高良大明神第三  
三高祖大明神と志登大明神と合せとて祀也  
御社と村と山田此中より林立り中よりあり神殿  
と知り向へり九月七日祭礼ありむり  
此日神楽園村と出り事於是日七人巫凡人  
神人亦其人八人此和初皮多く供奉して

祭礼として歳々祭とてその如く志登郡の志登  
とて郡中此を御階け社と志登社と作を  
しとて延喜とて事傷ち社権現と志登社此神と  
しとて祭於此社の祭礼儀式と昔より豊  
徳於元龜天正の比九列兵礼の時迄も概十二所  
の神田とて持共ありしとて其後此の比を  
五人の事祭も漸れとて志登田無く成り  
末社等も名社ノ跡ノを古くして田と成  
園と成ぬ物りよ元禄三年此甚前園至光之  
君新と社殿を建立しと志登社を改め造り絶



て寺ありし一鳥居を去る一宮所をいふ如く  
一神田を去りし一ひし一は神威も  
忽新ありして旅人の多敷も青いまうなりぬ  
形ありしは遠近の人にも訪てありし多  
一神と人の訪ひありて威徳増はるとい  
はる山宮神ありしや

青木村

長谷山乃西ありし青木村一青と長谷山の山の  
麓七寺川を流る一入多村流中ても入海  
ありし一もや去れし海邊より川を流る

流る川流をれし橋系と此所をいふ人も  
形ありし一も如くは神と各村也系は宿  
部と皆多本此物村之長谷山周至と成むひて  
ありし一は村より此は村より天神の社十六所  
有是故十六天神と云 今宿と系四氏を云一所之  
永福の比と云

七寺川

此川を上系多本村より流る如く長谷山の山  
海邊より流る一も長谷山の中程より流  
是故七寺川といふ村民の流るをいふ一此は  
七寺所寺此ありし一より七寺川といふを云

物もいふはまゝ七寺此よりき塔化所  
後よりいふは七寺此より七寺此より七寺  
其此川を海まで七寺川と名付し一寺遊

七寺

長生山乃南よりまき木村より数り西へ麓又所  
勅願寺聖徳太子の院明徳新より住持僧法賢  
子良助此山より長生郡麻を多く地中此後  
捨て又寺より遠り希む或時此山此住僧寂然  
と法賢と此交易の事海を起し一は此右  
軍府より此中を歩み人々遊し押へ

此を又寺より遊りては長生山よりと  
寺より法賢と嘆名此後一は長生山より此  
親と此より法賢と一は長生山より此後  
其後此後送致事長生山より此後  
一は長生山より此後送致事長生山より此後  
其後此後送致事長生山より此後

長生山

生老を長生山と名付し一は長生山より此後  
寺より一は長生山より此後一は長生山より  
其後此後送致事長生山より此後  
山門村の神の宮と名付し一は長生山より此後

海と鉄道中一志摩郡志摩村よか一と  
是古人の海道也故一古道と云うを海  
道と山の側と海路といふ海と山を其係  
系なる他之を代り世の折を尋ふ此山中は  
多く濃き石と及行人をさす事ありあり  
其時其監獄の人を切を海を力鉄道ひし  
多き力洗川といふ吾川舟山流道とを  
日久しとて山は緑林絶海は白浪あり  
往來の難人暗夜といふも悪人あり  
事あり又塔あり此山を志摩郡あり  
志摩山

少る流道出海水之薬と多海路の傍に薬水  
と云ふ少平水出あり又此山乃東北麓より山海  
至此処志摩郡一甲良郡一の境あり

今津

福岡より此所を行程三里あり昔は此地は  
唐船ありありは今此島津港の如し  
と云ふや去れども其村を西の多し入海首  
是故唐船例といふその如く大風吹き其時  
唐船を吹沈しと云ふ事あり今も平地に  
あり八幡の古記等あり本朝上代を

唐弘の来り集りし所と云又小菅寺盛  
公病卒の時世所より唐古の医師来り居  
りしと唐法談りしと云先王一人と法談りし  
云法らりされし是唐書純より云

龜山院文永八年九月蒙古の使者趙良弼  
等世所より着し牒状致し云云或云  
通事を以てしお射し及びしと云云  
魏修寺經長江の古院純十七出と文永八年

十月廿三日の紀子曰蒙古古船着岩今津郡  
舟所自左岸有  
お備二三里云云 棒牒状云云依此事一東使入洛

向西堂寺大納言亨西相三仙洞執奏ス仍俄  
今日二有評定し中師大納言奉行云此書  
今津郡と云るを津也郡の名と云ゆは  
又古事本云古事本云二三里と云るを得る  
事り古事本云此所と云る道程八里あり  
氣は是國の船泊あり法と云し是も是は  
むし此宅地の治市町の筋多く是且唐寺  
等此葛城も云り少ゆしと云るも於唐寺村に  
あり唐寺多く寺院も十二所あり世所より  
西の方海中は流ききまら候の長東西廿



二三丁あり山に所系あり山の海濱に千石弘安  
の比にひる賊の警をた防に記を築く  
石罫高砂まはり石罫の長きと後此長き  
とて一石罫を二石罫とすや  
中より堀りて少部取らるゝあつたて  
又此所の名を新田の年  
新田次家時多  
石罫の海をわたりを年  
多くを新田とす  
なり  
山の上は山の上と暮所を此所を警何系と

うやまひ一人の飛脚ありては暮所を  
別を備至の暮所とす又  
又材の東北後傍の  
大の社の社をり  
佐吉大神の比所と  
たなり此所を  
かたは法皇の  
山の方より  
とて事と志す

別村と云ふなり一曰新出明神奉志大明神  
去り九月廿六日祭あり今津の上比高  
山城昆沙門山獄と云昆沙門堂在り村作の備  
後今今津と七石の儀ありといふ此軍上  
おしウコモチ龍あり一を伴も此龍あり一未詳  
此軍より大威靈樹有は軍より今津御屋  
とて遠近の如凡平作家ありを今より  
今より布衣推ありまらりて保む此処を東八  
町許津つとまら後津と云村あり是も今津  
の用ありとて今津の後街と云名あり今と

別村と云ふなり一曰新出明神奉志大明神  
去り九月廿六日祭あり今津の上比高  
山城昆沙門山獄と云昆沙門堂在り村作の備  
後今今津と七石の儀ありといふ此軍上  
おしウコモチ龍あり一を伴も此龍あり一未詳  
此軍より大威靈樹有は軍より今津御屋  
とて遠近の如凡平作家ありを今より  
今より布衣推ありまらりて保む此処を東八  
町許津つとまら後津と云村あり是も今津  
の用ありとて今津の後街と云名あり今と

誓願寺 志云宗

此寺山と稱は今津より五里起曰此寺と伴長  
の女形ありと云今津より一里の遠  
せし所なりを婦姑云今津より一里の遠

よ志致後女友六刻彫の誓を遂へて方丈建立  
此致致金多のう川を誓致致寺に居月其始  
高倉院嘉應二年又月初七朝を誓へて三經の  
誓を立て了ら支六孫院の像を修りて了ら  
大徳義院致致う川を誓へて了ら法華持志千人  
致致誓す人へて誓ひて了ら誓を誓へて了ら  
以兼安元年十月致致小縣地人を修りて了ら  
牛山ふきて了ら二年其致致木を造  
吾安致致り回三年三月十八日佛像造立乃  
芥船一多ふ月廿八日佛像修りぬ回四年八月

其月佛堂の芥初五安元元年十月廿六日如親  
して法誓の素懐を遂終り吾家亦明る居  
信正瑞徳仁安三年入京して同年の秋瑞徳  
しりりう京朝の義理を申し事一切りり  
依りて安元二年う望治兼二年と三年り  
る此寺より修りて了ら切致の波海出りて了ら  
弟りて了ら高致の瑞徳あり集りて了ら  
家あり 御りて了ら七月十五日孟宗盆誓信の  
為り法苑一而致を書字出りて了ら  
の且那一寛智を致致交致人として了ら



て是を云馬一ノリ是を毎子七月の中あり

初々母より名改変を被るるなり已上強紀の伝なり  
は強紀と名物の他

此寺を遷す所より及して新造りも絶るぬ

兼知此寺上修せしる三王門を修せりあり

今中門を乞ふ如北初大風の爲り吹削さるぬ

於を乞ふは村民力を合せて新より三王門を

建せり又毘沙門堂をも兼知是を修せりは

此寺村より北のきき山より及りて今より修せり

三方四面の堂堂あり寺領多く有るなり也此寺

は院庭下文が軍家及領を此寺進状等甚多く

傳りたり悉記し進状を北田信經より此城を

修りて時と高ち領を多所せりを後ち領を

一むりて此寺の子院四十二坊あり

中比漸く修造せり二十四坊少成て長年中

是も高十二坊ありて今より及りて唯龍

姓院大泉坊と云ふ二坊ありて修造せり

皆民此修造と云ふを修造の者を此寺に及ぬ

又寺内より河内池堂に修造素師堂に修造あり

寺より白山権現ありて二寺より三間のの社此社

甚修りありて先を忠之國中より白山権現の



東陽村若東あり山脈より東を今津村と  
屬し其故より東北麓の田畠を今津とす  
是故他より山北南中後より東よりと徳野松現の  
社を故より修する松現山と云

小田村

東陽村の西北より西日此村より正法寺とす  
寺ありしころの代より遷轉して中  
親善寺と里れり又移し一里の東縁に  
此親善寺と大同元年より修りて此寺より安永世  
よりより亦を海山福壽寺といふ依禪寺

あり用山双峯和尙建武二年より寂せりと云  
年よりしりしり此後ありの寺に村の西北山邊に  
此を和色は流急の勢の筒の古よりあり物  
出家処あり又東陽村との境二合と云谷  
より色は狭<sup>カサ</sup>狭<sup>ツツ</sup>あり多く出川ありありあり一形  
物ありしりとり事と云はれたりしり小田交番  
唐泊<sup>カサ</sup>泊<sup>ツツ</sup>ありしり小田と云はれり  
今津より一里半ありあり海辺之より葉集

唐泊

今津より一里半ありあり海辺之より葉集

中みあると志摩郡 韓 彦とあり昔と今津  
も是所の船乗り集りし一々此処も今津も  
平浦あつた所ありとくしきも韓人の宿也  
依寄須金造ししよと里韓彦と云ふ所あり又  
能古嶋と云ふ所を其る二里所の海を隔て道  
共向ひしとありしとてそく又西古し一人の所  
能古の浦は此所と云ふと強於其より境  
越し叶しり東乃山側しと云ふ所ありしと云ふ  
う谷と云ふ此山の上しと云ふ所ありしと云ふ  
此所は西に浦北  
所はありし

五葉山

五葉山 能古北浦は立ぬ目と

千尋

千尋 能古北浦は立ぬ目と

第良

産地

産地 能古北浦は立ぬ目と

中務

中務 能古北浦は立ぬ目と

第良

大歳明神社

大歳明神社 能古北浦は立ぬ目と

少し日向山宗存神ありそとく村民とあつて此  
神とて之も是と大歳の神を阿多ありそとく成り  
九月廿九日祭あり之代宗流元意也○二月廿五  
日祭あり正古位上大歳神とて位五位中位ありと有  
祭とて神は夏を以て祭あり也幸甚部 初浦社  
村中とて大歳の神社有祭ありとて此所  
今津ありそとく藝場の友人多あり居とて神の  
名もいそとて祭あり也形神位とて送とてせとて  
成りて大歳神といふとて幸甚部 初浦社

東林寺 禪宗師家

唐泊山と稱し以唐泊村より至干光園師禪師の  
時此浦より看とて宿せりてありとて寺を立たり  
創此寺也といひり少とて一和ありとて寺ありとて  
遠を朗とて一とて係系此地なり

宮浦

唐泊より至一町許ありと小川須福とて村に宮浦  
とて宗依之所の明神を勧進して之を立と  
ては又此浦とて宗依とて此神社に祭ありの時と  
神靈治海ありとてありとて一祀神位とて一とて也  
今とて此儀ありとて祭ありとて九月廿九日祭ありとて神の



洞中暗室あり一神あり高麗より新迦佛の像を  
彫刻せしあり一故新迦年尼寫と云ふ高麗の  
所より一千里佛の像も所よりあり故高麗より東  
に轉して山口より一月餘の少年一艘載客  
於行事一船ありしと云く又西に轉して海に  
あり是洞の西にあり凡北に千里西にあり  
其より六十間許あり一月餘の水船あり在  
北岩の側より一葉螺辛螺カキ東海友人及徳の海  
産を多し一海に千里南四百里許より小島  
有る小札と云ふ島あり井ありあり十餘ありあり  
大札あり比之れは高麗一其島の西にあり  
て洞ありありありありありありありありありあり  
其地よりありありありありありありありありありあり  
俗に是を井の平と云ふ大札号小札号ありありありあり  
中には有る洞也かたは新迦年尼寫と云ふ一  
室より多しありありありありありありありありありあり

玄叟寫

唐のより東北一里許より福をよる海に上  
六里北に鴻神と云ふ鴻と云ふ又其神と云ふ海に鴻と  
云ふ一其後隊より玄叟寫と云ふより元史

よ又龍山とありて此島此事もや八幡志  
事紀に鷹島とありて此島の事一節あり  
寫の巡り一軍を首とて此島に民衆七千二百  
ありて永祿の初ありて世の擾亂甚し  
かりし時那島の海賊志願し來り侵し  
ありて此島の前に行を極く防とせり其時  
海賊船中人多く採略を執りて島の長根  
田平左衛門とありて之の能防を致しされ此海賊  
其難叶やとひん竹林と火を急ぐあり  
折るし海風烈愛吹されは人衆も火焼り

多平左衛門も防をよ候りて終に其所を  
討死して其墓ありし山あり海賊と云ふの  
中に乱婦して海軍を致し是ありて其海  
民先孫海賊此島の人事故然也云々其退  
多文浦より移りて其島に居りて其民を  
もたうて荒墟と為りし事四十年許あり  
物れ其多文浦に居りて其海に細く其  
もありしとありて其海に風をあり  
西賊の怒へも此の島は始此島にあり  
海三島といひて其島を云々ありて其



此の山也。至る海十二軍小勅。一々控擧ぐ。長年中。亦小勅。任り。其後。深之。仰り。親族。逐年。事。任り。漸り。他。民も。事り。て。村。里。成り。せり。又。信。統。子。云。信。子。り。と。 醍醐天皇  
御。宇。子。四。系。在。大。臣。公。光。此。子。百。金。若。大。臣。九。段。の。藩。鎮。と。して。其。後。成。り。任。せ。り。好。し。う。是。賦。の。勅。令。成。文。と。お。平。け。此。寫。り。上。里。遊。ぐ。居。あ。ひ。し。と。至。る。海。上。別。府。刑。部。貞。院。會。身。別。府。貞。貴。人。の。智。り。し。て。大。臣。任。り。建。任。休。ん。て。若。角。と。擧。ぐ。し。て。安。外。

昔。々。行。し。と。控。擧。ぐ。海。り。を。致。場。中。大。臣。鴻。の。志。を。と。し。勅。と。久。し。任。り。任。り。若。又。鷹。好。れ。し。年。久。し。く。當。無。道。し。縁。在。り。と。大。海。子。同。家。此。史。と。し。て。世。に。知。と。し。傳。人。を。り。委。し。と。事。と。世。人。の。口。碑。の。せ。し。れ。は。今。も。之。人。を。さ。ふ。も。あ。り。は。を。れ。え。し。や。此。史。と。し。百。金。若。大。臣。此。任。り。と。て。山。此。と。し。五。人。出。此。純。子。出。事。と。し。ひ。し。と。當。無。道。と。大。臣。此。即。也。所。と。し。人。の。口。碑。と。し。て。世。に。大。海。子。を。家。に。ぬ。を。り。と。取。と。し。大。臣。為。懼。多。し。と。ゆ。き。控。



許周延三所許あり此等皆石粒を如きこと  
七引一石を柱石と云ふは石粒を皆方たさ  
ら湯ありも多し又八角板も多し四角板  
稀なりと云ふ柱石大なる巨なり三尺許あり  
其石大戸の柱石を望み立たり此等の柱石を  
横よりの石あり或大小ありて同一如しは多  
く其端を割せり又柱石の側を割せり亦もを  
東北の方柱は見所なき多量に此石は  
寛文の前より集案をくひきりてと年を  
あしり

西浦

唐泊りたる山一里あり山の上は一里半  
あり此等神古なる民居あり一山の比より  
對する此家氏あり一人の子婦唐を争ひて  
秋と云ふ一ルりり討勝し老女復く唐老を  
鞆んとせし唐逃去ぬ漢人唐逃回節といひ  
この此女を唐とて是より家也漢ありま  
唐泊りたる山一里あり一里半あり唐家  
此子山より唐りて唐を名とす女を唐と  
唐泊りたる山一里あり一里半あり唐家  
唐泊りたる山一里あり一里半あり唐家

士業を止めて古民と成へし物産は膏も用  
ありしと云へり所は其所歟名付て膏石と云  
唐海りの所は西浦子所室歟築くは世り其所  
と本系と云ふ事遠縁ありも古宗氏と稱は左と  
西浦も又西浦と中野居しと云く漢人とも云へり  
其子孫あり是西浦氏居北地之と云此海の海中  
深く至る四五十方子鬼の如多と云大石二あり  
ひまをりそ高き事各二十方許そありも  
二十方許ありは海甚好り

櫻井

此里を山谷北より有る此郡の中央より其  
境内産を東に一里許あり小村凡二十之所  
あり山あり川流あり田圃あり郡中の  
大邑ありて上村とす一福名集北所より  
あり八所あり櫻井と名付しを高光寺と云  
桜井の西家の接し櫻井と云井あり此と云  
りつと名とせり

高光寺といふ所へは前よりありて寺は名に  
ありて是所の名は櫻井も此郡内より  
井と云井の産と一あり一石井あり此と云  
むり此井の例は夫あり櫻の産を其の傍に水ありは櫻井と  
云むり一の櫻ハ括されしと云云忠之井の例は櫻井也今今一石樹  
有此村の山より天の嶽と云ふ山二ツあり其を男嶽と云ふは女嶽  
と云男嶽女嶽より云々して小女嶽を男嶽より云々して大也とも  
母を方より能く由秋乃比天光寺謝成晩宗は此山よりなりは朝鮮

又由又伴勝者神文光結者一西上之山彼光者山と云む  
此山中より光者出ると云ふ事あり此山も又頗る一  
秋更のころよりあり時中光臨を此は對言辨解  
此里に内陸園と  
まて見由とあり此中より山者出あり

云此より与土姫明神の新あり与土姫と社号あり  
三月神直日半柱津日の三神を祀る所之は社の  
後より多知而より岩窟あり是と岩戸と云はる  
と地りて予正と云はるなり岩戸此口の洞乃長一  
或は坪横み是より二方中坪有此社創立の  
狀存りよ其長中又年曆成此年六月此夜  
の夜半此後より翌日二日此宮印の刻と岩  
窟の邊十町坪の乃西風移を電氣なり老

岩戸此口神て祀るに此處及遠近の人事  
見り岩戸村あり一町邑人下浦新たると云老あり  
浦とあり山邊より修長を畫き神ありと云ふ  
系譜此人吉田と云ふ試於たより此を印する  
く此神姓無異あり一車所帯て此人  
かう一々世よりと云ふ事と云はる人或まの  
ありり見るとる人も然あれは是事一神と能  
まはる見り人更り一物と云ふり一去れは是  
何中一此事一古多く物是は揚ありては初  
まはる虚説と書月並ありありといふ事人もは指し

く且乃中しき事かこころさる有古聖の刻あはは  
さるるり希有なる神矣古と云ふ小古漢く  
乃の同年十月廿日彼新在乃書よ若みく  
み年一の間ふ影をこころ時葉酒とのと出同様  
食をいじ厚くその教へありしは生を五  
年此間一向時葉酒とのと飲く居るる乃  
臥く葉後取とく一圓成而飲か毎日訪  
て来りてく古出と同し増たる事ありし  
事蹟は事年久しき遠近のゆへは  
忠之公是誠実侍人近臣とく事誠を

ゆふよ高持をり多かりあはは忠之公とくは  
新よ葉信一法は事秋同誠とあふよ事  
志りて一はは古よ葉一法は信公とあ  
しと岩戸此あ成山岩戸と同し高さは  
社成三人乃地を深きて心くありし神  
と地くせし於色出よとと性藤をきりあ  
階階ありしと及物とを強て寛永九年  
化成就しとく高部より吉田吉部中臣  
茂振清しと社号と与生母之明神と  
ら於末社て字と八幡大神一字は其月大神

一之宮を神祇彼八神殿と云ふは祇園と云ふは澤  
五又八角社社と云ふは先八百多神をいふは納む  
此中末社尚多し神厨神殿石鳥居あり  
又市社若西由光壽山の麓多社あり  
天照大神宮有り是市社創立此後神鏡より奉  
多忠之公より立給ふを後大神宮より奉給は  
海人多し多しありしと云ふは此を以て忠之公が  
社に神鏡置給ふ所しむは祝人を多くし無々  
祭礼成行りしは給ふ其年忠之公を慎む  
此中事ありて此神は新皇給ひしは神此若  
りし中一社若忠をいふは其を後と云  
う進らしむは其の務も略して何忠恕も多し  
しは此神のちりありしむはむは別社若  
のちを自ら多し書し社に筆あり先  
しむは信信海ありは浦氏を別社務  
殿よりして多し子毎成はは末社に遠りし  
田流の神事を云ふは先唯一神道を守らせ  
西中社殿の忠自らして諸社の神威此中  
忠を若浦氏より奉せし先むは佛氏の徒と  
ありししは吉田流に傳せり物を社の例

いふあり一に佛國多しを社傍も候して佛事  
成行行ひる事小此事一系部の古田を至も唯一  
神通志社に佛事甚多あり一一事一志にね候  
行なりを河法に一に元永三年に社安浦  
指す是毎成を成國表に中て悉く佛國成  
こりち傍を辟て至に神通成行行せり  
け文所をえりり神教をむよ向ひて坪に  
光壽寺藏を至事少を天丘山をくそあて此  
法社にむり一西よを神祠を至凡町を教へ  
海邊を是社にまうて事人の水塔に一と

そを社後より所之又忠之公より室宮への神  
寶成を納し一の中より長治公相解晋<sup>ミ</sup>列の  
城より取事ありむひ一寶珠をも家小納先  
西よ今より日く月くは神人多くお法をひ  
神是成節女時を節の祭礼を勤り事悔を  
一社に八月十八日を恒例の大会あり候業  
をも行らる毎年六月二日は岩戸成業をく  
系部の人より存せしむ此に社村中より社十

竹所より○谷権現

谷と云故材の山下に有社存を知らず  
其社藏を至を至は里民をある九月十八日

成業あり候むり一を社に人至社傍も六坊あり一を近代業部は  
及めて後社人へ之還り一業系村に有社中を至時をあり社に社傍の







と云々名産之 ついでに 寛文二年の此此村中

の牛亦續き廿四疋病死出しく皆斃病ありて  
同病之病月ぬまは必死は多折首防山  
口の伊勢古神宮の神藏此使来りし年  
死より生と云ふて云々山に迄も牛此病  
みたりされ死より生あり是を釋し似る志  
と云歎来りし牛と云ふ年白は在る病月と死  
はるをり此歎ありおと人をも多く懼  
集りて多歎種筆等と鳴りし彼歎哉かりお  
し歩數せばそ災止むと云軍民そは尤も村

中の人歎信一葉山を將ち敬謹筆を鳴りて  
物あれ七疋知あ海と此後て皆亦歎一市  
あそり牛の死より生あり一此歎此れを釋し似て  
山一而之長きと云馬の面は無り同  
かやと云り尾も程の如く一むと述るは  
くくもそ喚死変あり一と云野山を  
君よ是をん世中のくせをり根井よそも此歎  
牛を多く歎一あり在る後二匹かり出  
歎をりたあけりよそ後歎と部境村も此歎  
有りし歎物て歎せりと云此歎を皇明通地

及尾澤長瀬と云書し能せり書くと云物如く  
せいと志いと云お述し一凡此浦の系致去く  
去りて眺るる廣くはるる一此海より若屋の  
市より行り道北より大石多し

若屋

此道狭きへく之年の細き  
け村は安富の二店と云

若屋村を海中より出たり出たり出たりと云山海  
向より町より野山の西第一里餘り有る此村  
を多く地は青くはるる若屋村の枝  
村は一と云引は南より有る一古款  
一引は船と云一人如也の山を強る

若屋山より若屋と云也此山と云ひ一と云若屋  
如也昔相述し一寛文の末此村之在りといひ  
者の家より赤丸小舟あり志らく山より入程を  
ひ若屋の程を三段程ひ若屋より二と云程  
の程並りて之庭の端より庭は一及り三段と云  
若屋の物より先つて法蓮寺ありて庭中より庭又  
山より入一法蓮寺あり後又一法蓮寺あり大法蓮寺  
て又山より行り寺程大に庭より庭去りて大  
山より入寺とも程程寺と云一法蓮寺程を一  
法蓮寺の事と云若屋と云一法蓮寺は凡は







吟詠一海濱起々一志思海一一人思思也  
て急き返き走り一舟よ来て物々云々又此大門  
の東の方よ大門の岩山を籠り一車一三四々々  
しとく水中一岩名ありと云々おそろるころ水  
と下るころ舟評げ石も又四寸北角粒状  
横より重なり一ころ水一是れも洞窟は民俗海  
窟穴と云々又冬日山風烈一とく洋の波は大門  
の窟をお射とを管粒里より笑へて踏一柳氏  
所岩壁の来り一とく窟中の異感事一世名佳  
山水の勢よ物一以彼梓柳亭杜う才といふ事の

此美状形容一とくわく一湖上乙中此美觀  
ありから於於處と云々のありと有りやと云ん  
我目の中より一是よなくとくさるを等と  
只うとびらくと遠き麓の僻地よみそ評  
舟新産の圃よむら一於大海東北知らりある  
を息は風流を吹く一岩き波から於岩山  
まれば是れ日の極と一風浪穏やあり時を  
てと舟をさるる舟一とく岩よと見まうと  
き人もさうとてありと云れとむら一とるは  
此れ於事一もありと云うと云人の廣きを



國の事、欲さるる一、物造るも、是く作らば、又  
奇、物も、のせり、一、つる事、うらむ、一、

引津 はの字をむ

引津と春を村とをさそ何、西も、上り、り、春  
物と、物志、の、同、よ、ま、一、入、海、う、り、む、し、と  
は、海、一、春、を、物、志、も、方、よ、ま、に、物、造、通、一、多、文  
船、も、内、海、よ、入、一、と、ひ、物、よ、り、河、の、時、よ、う、入  
海、と、り、せ、く、皆、田、と、か、ま、り、り、り、と、田、地、元、み、云  
十、所、も、有、と、あ、や、此、内、春、を、此、田、地、を、い、て、中  
河、作、物、志、の、方、を、と、く、か、一、此、田、地、む、一、

入海、一、一、是、り、も、田、の、産、を、か、ま、は、貝、此、穀  
出、川、と、云、春、の、方、よ、ま、に、入、一、地、を、あ、の、山、立、石  
磯、此、方、よ、ま、一、今、も、同、の、甲、う、ま、し、よ、水、流、出、川  
海、より、甲、を、地、志、二、所、作、を、西、と、昔、船、の、入、一、所  
か、ま、は、な、た、を、か、ま、一、春、を、此、方、を、物、造、と、田、の、志  
地、よ、上、く、是、物、志、の、方、を、西、の、西、花、掛、の、神、の、後  
よ、入、取、ま、り、て、春、を、此、方、の、田、中、と、ま、海、へ、水、の  
流、通、出、海、新、の、字、も、春、一、物、志、の、方、よ、り、と、か、り、も  
物、造、を、り、故、海、を、さ、七、所、北、此、方、よ、物、造、を、あ、ん  
為、一、梅、は、も、て、是、物、造、を、記、し、物、造、を、無、う、た、雨、水

多く甲より入る事は梅を却り起て水を出は  
徳志の方をを記比志遊入の外ありしう史  
室の神新田とあるうしを古た此田と書きしう有  
りしう其田の名を神原と云引比比記あり田  
をこれとあり徳志比院周より属せり田地を若  
の田地よりしう遊ばはあはく形し一かうに四方  
陸地ありしてその中より入海を所を徳志より  
希しう其多院あり引比と名付し一と徳志若  
あふし遊引し一ありやみ船を入く遊于ぬ  
を神海へ入し一かうし一と船を引出し一と遊  
る

名付し一也

五世  
徳志

様引引比遊遊ありかのりそのを  
搦中のし一ありあはくあやもたのり

人丸

口

花さくまをふりぬるうし  
様引引比遊遊ありかのりその

ふりぬるうし

新報  
ナ

たまう記すのしとせしん  
様引引比遊遊ありかのりその

日

右の系よりあり若のりそとを神を  
いふのし一と遊をり成りしと

中草下ノ所謂海産と云物是之今も芥菰  
海産北海産と云一神鳥産と云も芥菰  
と云と云物を以稱せし一和名なり

立石寺

芥菰大門乃山北岬の旁に立石と云物ありを  
吾山法くさくし海を海と云山を海と云  
うり菰ありしと紋頂と云あり石款イハタテと云菰あり又  
乃菰ありしと方許と云此名と云菰と云立石山と云  
吾下の初傳次立石海と云是古款と云あり  
若菜之つ伝立石海と云我村の枝村寺山と云

所の東北海中さくさく山の西南に立石多し  
かゝありしと和と云し一芳由是古所のこ  
と紀出後又物と云此所海もつと菰あり  
と古芥の御よと云し

立石  
と云られたる立石海のつと海  
つと紀海もつと菰ありの御  
西行

穴背

芥菰村と云所許東北海中ふありと云一町  
平山と云海干ぬと云及海と云石階と云

其下ろ此れより劇のこころを横中より評す  
西の長三平間程有り其深きより幾らありと云ふ  
る中流よりいおき此方より之流一其劇の所  
湖干た夕時も好く一其流一其劇の所  
穴背より名月

燈臺背

赤尾此澳三里水より此流を造り山あり此より  
此背れより名月と云ふ一其流一其劇の所  
宗くけ亦換まらる之此所より其時と龍焼上流  
其下流より背より云ふ三河評す此山岩背之

西より此流より流るる是元并登此海より其時と  
龍焼上流より云ふ八月以後晴天像より其言  
其時より其より下里一二條或三條上流より其  
後下流より其言其流と云ふと云ふ此海  
其奥此尾の如く一其上流人を名いこの尾と云ふ此  
よ浪より元國より其の海より其流より其言  
此江の潮より其言其流と云ふ是事時珍より所謂水中  
の火あり其言其流と云ふ其言其流と云ふ  
此世中其の事其言其流と云ふ其言其流と云ふ  
の流あり其言其流の事と云ふ

馬帽子嶋

赤尾村より七里許澳に馬帽子嶋と云馬  
を幸記所なるを其は馬帽子の殿に似たり  
其嶋周圍又六丁を本なく畠なく古嶋有  
其岩多し一嶋の上より人先を彼嶋に遠

小金丸村

如也の山麓北乃林麓に村作云此少くは  
宅の傍に徳神権現是をいふに時此  
杖掛て休せむいふに杖三尺縦は許成  
石を庭より移し入るに石は名をたす

といて人よ婦をせ又此時施をいひし所  
とて此村の内小山の林麓に施山と云如  
又徳神権現の法能此先よりして漸如を  
神とて漸知と名付しり小き葦祠より依  
客より少し修行者秘託に徳神権現を神  
帝一徳能入るに及御炊 天照大神を  
換りおやと 神武帝此より天照大神  
能よりより佛心徳神権現を天照より  
おやといふも 神武帝より日向より  
日向も天照も両方たの如し似たり事と云合

稱さるるなり此村民のゆはれも是より少くなり  
又三國地誌より徳師控現天皇の事ありと  
て先軋をあげての事軋をいふなり和徳師  
神の事と云所之と名くしり形其事詳似る  
其多をれん徳師控現と別 神武事分今  
又徳師控現の役と云焉なりと云 神武事  
徳師よりいふなり玉ひり上焉其世より  
し多日中紀より見えたりは先又右の事と物也  
を此前と別 神武事日向をよす世も時  
此体具よりり地ありやけは日向をよす

のありありなり此村民のゆはれも是より少くなり 神武事

日向をよすなりは先又右の事と物也  
日向をよすなり一國田此宮より平宮とせあり  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也  
高事日向をよすなりは先又右の事と物也

此山は古くより

可也山

山平丸の枝村親山と云村の上より北に親山  
塔子と云しとも実と云也の山あり林原を至  
中より十三町許を至る自取れ廣さ南山此所  
東第一町竹村を越す山の麓此山より山平  
丸より田原庄麓を具塚の西村あり山の北  
七町ありとも此山何方より見えとも同し  
北より山平丸は平野頗る富土より北に  
北麓此山を至る山平丸の北より北に

かろくはる海り一山にして陸親と云す一山平丸  
四方城をむ京より北にあり一山平丸も近  
り由宗宗親法師の麓此山行は箱根此山  
より一山平丸の北より山平丸の北に  
此山の事也一山平丸の道此山北に早  
此山麓此山あり親山尾山此山北に  
親山一山平丸と云す一山平丸は此山  
らん此山を北首より村民も加也山と云  
をき海を加也の海と云知れ可也山と云  
此山麓此山あり親山尾山此山北に  
此山麓此山あり親山尾山此山北に

乃のよき書系と加也系と云ふ山加村と加也塩と  
云ふも皆可也山此種麻少なる者多し可也塩今も  
所中多して貝塚と云昔小早川隆宗の時此系  
の捨化焼く可也塩と書り此山より古傳あり  
小倉元氏終一少補良種出たりと云美濃集十又  
出之遠唐大刹官引付亭舶泊るん時此寺下  
草花臨訣りたりと云山ひそに終た  
あや乃山道よりと云麻少のくも  
引付る此道よりなるは此祠と云はてもいふく  
可也山の此処事を知りて一は山背と本堂

多林本多あり一は小早川隆宗者國の至をり  
一は時意は他寺に於て是秀吉公御辨征伐の時  
那古尾此傳是他の村界みせりま一は也物進  
は昔と麻も多あり一は也は可也山より麻吹  
くありありんたり林本を多く一は山背  
あやの跡道といふもか所一は山背上乃  
昔と云ふところの久し一は山背の吹  
下と云ふのあや此山道よりなる麻の  
さうさうさうさうさうさうさうさう  
なぬり可也跡は山背よりや席



みしめた夜半にわしはありあり

赤山より霞現の社を是徳那後現なりや又山  
若水の中後小連丸村のより虚室院堂あり  
と山あり菴なり古ありと大伽藍ありとそ  
なり礎跡あり寺もたつ傍ありとそそ田跡  
も跡ありと元和三年長治と日光山名 惠照定  
は石北島居築造立ととまんとそと中山の石  
を以て島居を地り船より案をて南海とめく  
らと日光の 津原前より立船石を五と  
新より緒吉村のよりよとまんとと山の南邊田村

の東より出ると船の案ととつと中山のわたり  
よりも船大者多し

福島の島大の神の名居福井と上座  
大明神の名居もけしやを出とる

### 下やの海

下やの海と可や北山乃西入海と久我船越の  
水取志北東ありと此入海とくまるとる傳案あり  
船より久我船越の方より山より向ひて見後とそは  
系より船越の西に龍王の社北より見とる系  
いとより丹波の与謝北入海と似たり

### 改志

赤屋より西南の海とそと有村と下やの海より

之り井原より海とあり行所二里五陸行去  
とくちまは半里館に此所と住居大明神の  
社と云は花掛大明神と云ふ教に從姫大明神  
吾雅大明神もあり一書に社人説より此子  
孫と云書昔 神切皇居新羅と云き此所は  
社の側成山と云く社を掛へ住居大明神と云  
アと云依く之所と云掛山と云後と住居の  
法社と云く花掛大明神と云

南林寺 曹洞宗

改志此月より此所より曹洞宗と云寺と云

慶寺と云名のと鐵と云と志之公此对上座部  
多野村の八坂と云所と云南林寺と云曹洞宗  
あり一寺此中此所より曹洞宗と云寺と云  
此村の福一八坂と云と云此寺と云南林寺乃  
宗寺を再興と云此寺と云南林寺乃  
東寺ありと云此寺と云一全神寺開基此寺  
と云此寺一弘治此比にひ住土部高祖の地  
と云原田裁前寺瑞穂塔一利樂と云不案  
と云寺坊子み節種門二男三高懸種三男法高  
種吉此一人と一樓の兄弟之四男親種と後嘉の

ろうてい父の筆光浅くは物よりけ親種は  
 世継よまんととの前妻子を誅し〜少く  
 兄三人と名和之三男種を平堅承久の忠子  
 よめて所叙の行〜は実なり〜兄二人と父の  
 悲心事を〜是上能く種は忠直本  
 氏部入道乃智と云老徳とを撰入種は幼子  
 種門二男繁種二人有り小繁害にそり母を尋  
 所取治比比之系田も防沢山台の大岡氏と  
 希くは其比太友宗隣述下子厥快そらひ諸家  
 くとる皆海に流る時長なれに種種を無と  
 叔を隣り歎と語〜危〜とて種門繁種は  
 父種種太友家を頼〜慎〜の内後  
 五彼本乃智と云性凶悪の小人あり〜  
 は種門繁種是をふ〜む乃智恒々父の氣  
 下に不慮事と〜意〜〜此時を孝と云ひ種  
 種子種〜〜之五節五二節及之太月を以  
 太友及の明ひ忠直時を引出入文を子討  
 出金也必之秘達とある人〜ゆかひ〜上忠直  
 して告を隆種忠直〜後妻は忠子不  
 達子と信を希〜乃智〜種は杖信〜是非

の沙汰も果及及智よ其人の子借珠と云ふ  
中付り及智と云ふは其の妹也是も京田中  
大原海邊入道 名あり所上行志くくの中其  
名ありと云ふは時今其人に押毎封人と云ふ名あり及智  
氣又と云ふは孫と云ふは孝と云ふは用之の弟と云ふ  
子入其子海邊古二輩と云ふは近付いと其輩  
三輩及子集りて此中其輩と云ふは及智封と  
集りて一行時も其中一は立近其輩及を其  
中入海も借と云ふ近へと云ふは其の  
乃智名あり其人種門無種り部一は其の

四つて内五世一は其人と云ふは及智の  
是名名あり内五と云ふは其の  
名ありと云ふは果以其人と云ふは海邊を其は是輩京田物  
祖又海邊其族多んと云ふは海邊此方一は其の  
世一は其の族平戸も一は其の族五れは海邊方一人と  
其の族一は其の族の首根系なり少一は其の族志志  
道邊其の族と云ふは其の族平戸此方一人と云ふ  
其の族及智と云ふ三人と云ふは其の族志志と云ふ  
其の族及智と云ふ其の族志志と云ふ其の族志志と云ふ  
其の族及智と云ふ其の族志志と云ふ其の族志志と云ふ  
其の族及智と云ふ其の族志志と云ふ其の族志志と云ふ

予も二篇終極之強弓の精兵之也れも多しの  
者去多く手負村敷き能知れ其害を究り  
二篇の歌一しゆく終り猶ありきり少敷きなり  
しよやあ人おて出此方の氣あは七五田と云  
甲比より去り我ひあも少敷進敵一終り切取  
を種門と云二歳終極を十七の事と終り終り  
大系長なる子伯母も終り人とは先小我死を去り  
即りゆく是を笑人少敷進一敵をれと云終り  
か一か南村寺の山よ井より平を所より石より  
是は牙強を起て切取せし所なりや是は強二年

八月七日の事あり強終極を子の罷方き中級終  
乃強強強強人一しゆく終り終り終り  
池田河系よあむらひ及び強父より強母の事あり  
強強りけり乃強強を強終の事人き強りき強  
よ甲良那羽戸村よ強強人ありは強を強り  
行しし終り一強人きひたりと強一強り終り  
あつた是身の料道終りし終り終り強り終り  
人とは強り入強り夜の曉よ強強強を強強  
て強強へ終り一強り強り強り強り強り強り  
並高強り強り強強強り一強り強り強り強り強り

女子を聖賢に抱きて育つて居るは其の  
徳ありて道徳に及ぶて女子をよき女と  
家元と名づけしは周布未大系とて聖賢  
中本氏と名づけしは聖賢とて聖賢と  
て亡びしは聖賢とて聖賢とて聖賢と  
新よきとて聖賢とて聖賢とて聖賢と  
夫人此親の子供とて聖賢とて聖賢と  
つらうて婦人として聖賢とて聖賢と  
私私とて聖賢とて聖賢とて聖賢と  
教へて聖賢とて聖賢とて聖賢と

其甚るるを永く後世に傳ふる事一徳なり  
ありて徳一として聖賢とて聖賢と  
此一として聖賢とて聖賢とて聖賢と  
子君は聖賢とて聖賢とて聖賢と  
婦人たるは聖賢とて聖賢とて聖賢と  
亡びしは聖賢とて聖賢とて聖賢と  
聖賢とて聖賢とて聖賢とて聖賢と  
聖賢とて聖賢とて聖賢とて聖賢と  
十石の徳とて聖賢とて聖賢とて聖賢と  
一たりて聖賢とて聖賢とて聖賢と

是則一糸田子息五人の毒をなすもの故に村人  
 亦も灯をとりてその神を祀りしに寛永  
 の末より宗を改めしむるに社を立之る神  
 といふひは海と地

新所

彼志よりあるはありしありしに村里あり  
 親世者事別の別書此を成りしに時正和六年  
 此の比此より一村を立新所と号し其民を六  
 十餘軒あり

娘島

古歌より作らば郡とあり  
 此より福をうり十里あり

彼志よりあるはありしありしに三里伸の海中より有る  
 故志の燈を添りしに二里鴻のありしに廿六町五平  
 八町ありしに東の八町三平五南の十二町十三町あり  
 此の島より民衆三平五戸ありしに娘島大明神の社  
 有るは娘島と云ふなりしに後より作らば郡を是  
 たりしに娘島大明神の社を以て改めしに云ふ紙屋  
 も同一島ありしに海をぬれしに娘島大明神と云  
 稲田娘をよらしに島もや六月八日五日支目象  
 礼五里人の云ふ所の女人ひりしに難産道  
 神船五里と云ふなりしに娘島産しやと

かゝん

下知平の夕さうりうけてとまうるまへん

六帖

君うまをぬふいよのしきん

人九

船越

船越之久我浦之故志を南一里山の此中村  
東海を港に法きたまふと山を海に在る海申  
の例也例の横一河許を三河許之系を東よ  
る船越と西よる吾間系を西よる各村は各  
三河許有例の古山の海山の如也北海南  
も又前系北前と入海ありも海を廣く山海と

せり一昔此浦の漢人山風烈変時を如也の海  
より船を引くも海へ歌一も風を歌一  
亦此は舟歌引く山海へ歌一乃は是漢の為  
風より歌一吹くさげ方へ舟歌引歌なる船歌  
と名舟舟歌の民家の西北又河可也の海の如と  
下よ山よそひく龍王の社を此神を此地有  
そく編民甚なりびそ地地多歌ありは神  
を無きも宮ありそ前よ大なり松を中よる地  
より伏しそ中道より海ありと歌一まはり  
神船の内は石此あり周九寸中よ白紙括理あり



龍王の社あり取茂新王う鼻とらふ京致也  
より一船載の西成山のあぐり一里中海中よ  
有く一船のちとく一皆船載村よ為せり白鳥  
多く水田さくさく一そまふ一民衆少有り其  
西の出御新鷲北首と云成志の西のあ傍野を  
渡りしと云一近き事一也軍評之

久我 里人こくご云くうとこくきをせくうと云うは  
あま北久我氏城の久我の里も皆こがと云

久我此由村を漢人の住あり久我浦より少隔  
て小よ有久我浦のよりと船載の所と評よ記一  
これえまよ略以久我よ津徳と云曹洞宗あり

近世唐寺と云成仙寺程より少隔とく一親近  
薬師の本縁を古昼此佛像存之馬の角成  
綱む長守久我の後新町よ寺の村ありと云  
久我此枝村ありと云一はくも成地ありと云南新町  
と海よせり此之を田村と云又入海と云  
法事新町一久我の市村と云よむひ寺  
山と云あよむひひてあり西一寺の古法成村と  
お射せりむひ一と云苗のあの入海の小北方十所  
評加也一極急と云て海せり一と云近代と云うをく  
新田と云あり新寺と云し法成のりもすと云田成

久嘉寺山の北やも三方を海よりく一方港よ  
法を語り久嘉を東海より入海をて加也の山  
よととあり入海二東海よわさありて又西  
聖北寿庵の海濱ありふ法忘久嘉船歌寺山  
急田法庵の入海ありありあり傳説あり又  
久嘉寺山の麓を山よとあり行の越山は  
よと山二顆ありありありと云ふ東の麓  
よ加也村を

御座村

此村可や山若あり乃麓ありあり久嘉村の板村

寺山と云所を山ありて海濱満き御座村也  
村の名を法庵と稱せしむり法庵乃  
親世音寺建立之時中よりせんて中華より  
阿彌陀の像を渡して佛のなりを觀し鉄の  
扉設此像よりありあり法庵よりありあり  
長江尺二寸ありありありありありありあり  
里今よりありありありありありありありあり  
ゆりてありありありありありありありあり  
うはけありありありありありありありあり  
ありありありありありありありありありあり

寺の振立中ありて天正十四年法皇御岩窟  
陣の事記薩摩の兵共河内院佛次郎等  
錫より錫る世経より河内院佛次郎等  
也此河内志る法皇御神の社五志る河内院  
佛次郎中華より錫る時法皇御神  
あゝく志る是なりは入道の志る改大御神  
城船中に勃結して風波の難を道通人等也  
新皇より錫る錫るは此地より錫る錫る  
此より錫る改大御神と云ふは日本武尊  
の御子中城皇の世経なり是也肥前國志る改

の神より錫る錫るは事三代天皇御  
世より錫る錫るは事三代天皇御  
田村の内皆昔時親世言ち此領地之田村の  
道通より親世言ち別當の墓取之村人志る  
望極と云ふ是也新所もむりは法皇の  
内ありは是也

久壽村の田村寺山と云ふ所より親世言ち  
別當代々の位牌所を原に寺と云ふ

逸 田村 海濱より錫るは是なり

可也山志る是也此林麓より錫るは是なり  
おひひて是の間より入海を隔川此入海と加也の

海のありありと列して入海の長き船歌の西海  
の首と云ふ後より東南前系と二里と可也此海  
と此入海のあり久系船歌の海の中道と海  
をり

新田村

新田村志小よ小邑あり之れ四年長治之休地を  
宗之甲とあり一先也少れ又新田と雖以宗  
麦和系正則と一之と事と監系せしむる  
と云ふよあは川後和系川と云ふ

潤村 益水 観音 平等寺 白持塚

福島の里此新と四里と云前系と是より三軍許  
ありあり此村志通海と土師と云和五船と潤  
村の中名を土師と云一とや一此而  
平等寺と云禪寺と云寺と云て宅化一何迄  
と云此土安民と云宗此寺と云一と云亡して其址  
と云一と云一此寺と云一と云一観音今存  
と云土師と云一と云今平福寺と云存益平等  
寺と云寺と云多あり一と云一又益水の  
観音と云船と潤村志和村と云一と云一佛と云  
土師と云梅と云土民此と云一と云一此観音と云目あり

三神の觀音と云傳へたりて予と京都清水寺  
二つと筑前草水三つと肥前赤水之佛體と  
奇<sup>キ</sup>古<sup>コ</sup>香<sup>カウ</sup>山<sup>サン</sup>て他<sup>タ</sup>と<sup>ト</sup>家<sup>カ</sup>と<sup>ト</sup>秘<sup>ヒ</sup>佛<sup>フツ</sup>之<sup>ノ</sup>形<sup>カ</sup>名<sup>ナ</sup>と  
佛<sup>フツ</sup>と<sup>ト</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>ト</sup>遠<sup>エン</sup>近<sup>キン</sup>と<sup>ト</sup>遠<sup>エン</sup>近<sup>キン</sup>と<sup>ト</sup>遠<sup>エン</sup>近<sup>キン</sup>と  
東<sup>トウ</sup>の<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>し今<sup>イマ</sup>觀<sup>カン</sup>音<sup>オン</sup>寺<sup>ジ</sup>北<sup>キツ</sup>土<sup>ツ</sup>山<sup>サン</sup>も<sup>モ</sup>剛<sup>コウ</sup>平<sup>ヘイ</sup>筆<sup>ヒツ</sup>寺<sup>ジ</sup>  
の<sup>ノ</sup>地<sup>チ</sup>内<sup>ナイ</sup>ありし<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>當<sup>トウ</sup>世<sup>セ</sup>と<sup>ト</sup>觀<sup>カン</sup>音<sup>オン</sup>堂<sup>ドウ</sup>北<sup>キツ</sup>土<sup>ツ</sup>山<sup>サン</sup>  
と<sup>ト</sup>極<sup>キョク</sup>し<sup>シ</sup>り<sup>リ</sup>境<sup>ケイ</sup>あり<sup>リ</sup>是<sup>コト</sup>を<sup>ヲ</sup>向<sup>コウ</sup>料<sup>リョウ</sup>進<sup>シン</sup>土<sup>ツ</sup>岳<sup>ケツ</sup>鎮<sup>チン</sup>氏<sup>シ</sup>  
臺<sup>タイ</sup>之<sup>ノ</sup>方<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>山<sup>サン</sup>臺<sup>タイ</sup>も<sup>モ</sup>か<sup>カ</sup>邊<sup>ヘン</sup>境<sup>ケイ</sup>も<sup>モ</sup>た<sup>タ</sup>く<sup>ク</sup>て<sup>テ</sup>そ<sup>ソ</sup>他<sup>タ</sup>を<sup>ヲ</sup>明<sup>メイ</sup>  
せ<sup>セ</sup>し<sup>シ</sup>り

畑江村

舊<sup>キウ</sup>記<sup>キ</sup>曰<sup>イハ</sup>志<sup>シ</sup>摩<sup>マ</sup>郡<sup>クニ</sup> 滋<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>江<sup>カ</sup>庄<sup>サタ</sup>と<sup>ト</sup>布<sup>フ</sup>と<sup>ト</sup>滋<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>江<sup>カ</sup>と<sup>ト</sup>郷<sup>コウ</sup>以<sup>テ</sup>  
天<sup>テン</sup>長<sup>チヤウ</sup>二<sup>ニ</sup>年<sup>ネン</sup>八<sup>ハチ</sup>月<sup>ゲツ</sup>十<sup>ジュウ</sup>日<sup>ニチ</sup>以<sup>テ</sup>滋<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>江<sup>カ</sup>と<sup>ト</sup>年<sup>ネン</sup>以<sup>テ</sup>上<sup>ジョウ</sup>代<sup>ダイ</sup>を<sup>ヲ</sup>  
此<sup>コノ</sup>所<sup>ノ</sup>と<sup>ト</sup>海<sup>カイ</sup>邊<sup>ヘン</sup>と<sup>ト</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>為<sup>メ</sup>山<sup>サン</sup>岩<sup>イワン</sup>振<sup>フ</sup>り<sup>リ</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>入<sup>イ</sup>海<sup>カイ</sup>を<sup>ヲ</sup>  
し<sup>し</sup>る<sup>ル</sup>海<sup>カイ</sup>邊<sup>ヘン</sup>と<sup>ト</sup>あり<sup>リ</sup>堺<sup>サカイ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>テ</sup>田<sup>イデ</sup>と<sup>ト</sup>お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>又<sup>マタ</sup>此<sup>コノ</sup>所<sup>ノ</sup>と<sup>ト</sup>  
り<sup>り</sup>と<sup>ト</sup>畑<sup>ハタ</sup>土<sup>ツ</sup>郡<sup>クニ</sup>の<sup>ノ</sup>内<sup>ナイ</sup>あり<sup>リ</sup>寛<sup>カン</sup>平<sup>ヘイ</sup>八<sup>ハチ</sup>年<sup>ネン</sup>志<sup>シ</sup>摩<sup>マ</sup>郡<sup>クニ</sup>と<sup>ト</sup>屬<sup>ゾク</sup>以<sup>テ</sup>  
文<sup>ブン</sup>善<sup>ゼン</sup>三<sup>サン</sup>年<sup>ネン</sup>八<sup>ハチ</sup>月<sup>ゲツ</sup>多<sup>タ</sup>江<sup>カ</sup>之<sup>ノ</sup>藩<sup>ハン</sup>系<sup>ケイ</sup>次<sup>ジ</sup>刻<sup>コク</sup>て<sup>テ</sup>畑<sup>ハタ</sup>土<sup>ツ</sup>郡<sup>クニ</sup>と<sup>ト</sup>入<sup>イ</sup>其<sup>カ</sup>  
原<sup>ハラ</sup>田<sup>デン</sup>種<sup>シュウ</sup>直<sup>チキ</sup>り<sup>り</sup>才<sup>サイ</sup>三<sup>サン</sup>高<sup>カウ</sup>種<sup>シュウ</sup>貞<sup>チン</sup>神<sup>シン</sup>と<sup>ト</sup>此<sup>コノ</sup>所<sup>ノ</sup>と<sup>ト</sup>伝<sup>デン</sup>是<sup>コト</sup>と<sup>ト</sup>  
伝<sup>デン</sup>と<sup>ト</sup>そ<sup>ソ</sup>の<sup>ノ</sup>氏<sup>シ</sup>次<sup>ジ</sup>滋<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>江<sup>カ</sup>に<sup>ニ</sup>と<sup>ト</sup>稱<sup>ショウ</sup>及<sup>キ</sup>種<sup>シュウ</sup>貞<sup>チン</sup>と<sup>ト</sup>そ<sup>ソ</sup>の<sup>ノ</sup>氏<sup>シ</sup>次<sup>ジ</sup>滋<sup>シ</sup>多<sup>タ</sup>江<sup>カ</sup>  
に<sup>ニ</sup>と<sup>ト</sup>傳<sup>デン</sup>是<sup>コト</sup>と<sup>ト</sup>畑<sup>ハタ</sup>土<sup>ツ</sup>村<sup>ムラ</sup>の<sup>ノ</sup>内<sup>ナイ</sup>と<sup>ト</sup>丹<sup>ニ</sup>波<sup>ハ</sup>為<sup>メ</sup>と<sup>ト</sup>云<sup>イハ</sup>ふ<sup>ル</sup>  
あり<sup>リ</sup>是<sup>コト</sup>畑<sup>ハタ</sup>土<sup>ツ</sup>波<sup>ハ</sup>と<sup>ト</sup>居<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>ト</sup>し<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>一<sup>イツ</sup>宅<sup>タク</sup>の<sup>ノ</sup>址<sup>シ</sup>あり<sup>リ</sup>曰<sup>イハ</sup>ふ<sup>ル</sup>

大権を以て之を築地と云ふと留と成る楠松  
井のし杉跡より種貞より其の孫は多に  
小次郎種則系田不業子仕へりる系田信種天  
正中み平秀吉公より里領地没収せしれ既後  
馬本より以て時種則も既没せし其地を少治  
りり依て陰奥より成りり方と成り成り成り成り  
後既没成り成り成り成り成り成り成り成り成り  
秀秋此時信貞と出づる部一と成り成り成り成り  
其より孫は種貞よりあり

馬場

古所権現の社を古所と云ふ

八幡大神

神切皇后成内大臣徳孫権現三所之其法祠を  
村の上といふ所は林中より其の神ありて編  
郡より其の法文も頗る九月廿九日祭礼を  
流瑞馬次行り成り成り成り成り成り成り成り  
鹿部一の忠社と宗祭より近記法を此三所  
権現と志摩の忠社と宗祭より成り成り成り成り  
と遠近より其の由りて其の人多きて志解り又  
此村中より古傳の址あり

泊村

此所と此比の間むしと東北の方より遊入  
る元和四年此比村より新田出来てより遊入るは  
いふ人けあふも座船着しと云はれりといふ  
之れも是よりして此名ありて田の名も遊  
浦と浦帆粒と云ふ所有皆海濱より遊入る

大日寺

大日山と稱は此村よりありて寺と云ふは  
此と遊入りてお修りて曰天受四年秋光勝上人  
より事りて割立せりといはれ大日此像大成佛師  
ありけり志摩郡又佛のつや此佛の變此大

日此像よりはちたき物中人形をいひ是空也夫  
正化の遠孫といふ今を志と云ふ人といふ大日  
昔より九品の急佛成修せり先今に健二  
年といふそ業より四より行しと云遊靡  
の音業をいひ一信をいふこといひ一人に翻し  
又傀儡此舞ともいふといはれ是亦中よりいふ  
蓋屋棟木此急佛無福と云寺中よりいふ  
新之正月廿八日廿八日大日祭といふ正月廿三日  
は空也といふをいふ

板持村

村中よは松太閤神の社を九月廿三日祭礼有  
毎の宰府の社家つて人死事うて祭事と勤  
む神樂を舞九村と流りたり古き此村も  
宰府天満文の神祭ありし此例有る也  
婦メ史ヲ石

吉田村山と七分許り大石五丈向き度吾の  
おしくそりたる之を古に石横つた許を古に  
まじりたりしりもきくしり時を古に  
ふりり人をも氏信を流婦史石と云ん

津和崎石窟

津和崎村は西前の間入二方又尺横買石入は  
奥北方を走史古入一方み尺横ぬ尺三方と大石  
幾多むむ入口をたたくと岩有る之を古に

大蛇ヲ島

此嶋を西浦より走此方より北より十三里海中  
よりあり嶋の如く二平六所南水の長さ十一町  
東西又町中凡るを古にありて度横長にたる  
れりうち入り大蛇を古むりし此嶋より大蛇を  
しは此島有りといひ嶋入りり古も於此嶋  
中一穴ありて古に云此嶋より古に祭大神の社



所重之文圖主之なり北常あり是船の事を考  
世人為徳多欲在給其番所あり其島の民の  
好む百人の事もありは小島あり



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



